カトリック山形教会報
かすみ
7・8
2011.8.14

カトリック山形教会
〒990-0039　山形市香澄町2丁目11-15　TEL.023-622-3574　FAX.622-3590
ホームページ　http://www.catholic-yamagata.com/

「マリアの遺言」

カトリック山形教会主任司祭　**本間　研二**

母が逝ってから2年半が過ぎた。1月4日早朝、友部修道院でのミーティングに参加するため、正月三が日を避け、深夜の高速道を走り、ようやく茨城県に入った時、携帯のベルが鳴った。施設からの電話で、母が亡くなったとの知らせ。遠からずその日が来ることはわかっていても、やはり突然の報に身体が震えた。その場からとんぼ返りし、母の遺体と対面。祈りより先に「ありがとう」という言葉が口からこぼれた。

母の遺品を山形へ運ぶが、しばらくは整理する踏ん切りがつかず、半年ほど経ってからようやく整理し始めた。

洋服や日常品の中に日記のような物があり、所々に神父である私を気づかう文面があった。

母も信者であったがゆえに、教会がおとぎ話のように愛だけが満ちている世界ではなく、ドロドロとした人間の醜さもうごめいている世界だと知っていたからであろう。

こんなにも思っていてくれた、こんなにも祈っていてくれた、亡くなってから知った母の心でした。

込められた人の思いは、すぐに届くわけではない。タイムラグ（時間のずれ）がある。母の思いも後で届いたタイムカプセルのようにゆっくりと私の心に届けられた。

マリアが天に昇った時、使徒たちには何が届いたのだろう。そのことは聖書には何も語られていない。しかし、マリアの声が長いタイムラグを通って今、私たちには聞こえてくる。

「あせることはないんだよ。人は競争するために生まれて来たんじゃないんだから。走るのに疲れたならしばらくお休みなさい。お休みしないと自分が走っていることにも気付かない。そんなことになってしまうよ。たとえば『世の中はそんなに甘くない』というような、物知り顔の台詞におじけづくことはないんだよ。そんな物知りになるよりも、悲しみを知る人になりなさい。悲しみを知る人の言葉だけが、人の心にしみじみと浸みてゆくのです。悲しみを知る人の手だけが、あたたかさをふっくらと伝えることができるのです。

（ひとりぼっち）の悲しみをたんたんと担う人になりなさい。神さまがそんな悲しみを与えられたのは、まんまるの愛が生まれるためなのです。たんたんと担っていきなさい。悲しみを担うことのできる、そんな人の悲しみから紡ぎ出される愛こそ、人を切々と愛する愛にほかならないのだから。

愛は痛むものなのです。自分の身を裂き、身を削る。心を砕き、心を配る。だからとっても痛むものなのです。身を裂けば血が流れる。だからそれは命がけ。命をかけても伝えたい、それを愛と言うのです。愛を知っている人は痛むことを知っている。愛する人は悲しみを知っている。その愛をいちばん最初に教えてくださる方を神と呼ぶ。

その痛みは、あなたもまた愛を伝える人になりなさい、愛する人になりなさい、という神の願いが込められているのです。」

天に昇った母マリアの声が、私たちの心に静かに響いた。

早朝に墓地でミサ

バスで送迎、移動手段の心配を解決

7月31日（日）午前7時から、今年最初の墓地ミサが行われた。5月29日に予定されていた墓地ミサが、あいにくの天候で中止になってしまったためである。

まだ、日ざしもそんなに強くない、涼しい早朝の墓地ミサは開放感もあり、とても心地よかった。ミサが終わり、神父がそれぞれのお墓を祝別するころになると、辺りはセミの大合唱。ジリジリと太陽も照りつけはじめた。

年に数度の墓地ミサには、お墓の掃除も兼ねて、毎回とはいかないまでも参加しているが、年々、参加者が減っているような気がする。信者の高齢化や墓地を所有していない方には、やはり縁遠いのだろうか…。

墓地ミサに行きたくても行けない事情は、人それぞれあると思うが、そのひとつに移動手段があげられる。これまでも数台の車に分乗し、ミサに参加する方法がとられていたが、墓地の駐車スペースは限られており、周辺の道路に路上駐車するのも少なからず問題になっていた。

そこで、今年から墓地ミサにひとりでも多く参加できるよう、マイクロバスの送迎が行われることになった。神父自らが運転し、墓地前の細い道をほぼ満席でやって来た。地道ではあるが、こうして問題をひとつづつ解決していくことが、墓地ミサに参加する信者を増やすことにつながると思う。

私が山形教会に転入してきたのは昭和53年。33年も前のこと。当時は墓地近くのあこや町に住んでおり、この墓地前の道路は会社までの通勤路になっていた。もちろん当時は墓地には何の縁もなかった。

墓地に初めて入ったのは、当時こまくさ保育園の園長をしていた小林正雄さんご夫妻から、「お墓を建てようと思っているんだが、お墓に彫るユリの図案を作ってくれないか。」と相談された時だった。そこで、見た墓石は明らかに、お寺にある形とは違っており、とても斬新に見えたことが記憶に残っている。その頃は、大きな桜の木があり、春は花見をしたり、秋にはいも煮会をした。門には古びた金属製の扉があり、防火用水の小さな貯水池もあった。

あれから時が経ち、人生の折り返し地点も過ぎ、ようやく父が眠る墓地にも目がいくようになった。今までは数カ所の決まった墓に行き、花を添えるだけだったが、見回してみるとなかなか個性的な墓石が立ち並ぶ。思いが込められた文章が彫られたり、マリア像があったり…。

多くの方が眠る墓地。墓石に刻まれる名前を見ると、生前の顔が思い浮かぶ。教会でお世話になった方ばかりだ。掃除はもちろん、この方々にお礼を言うためにも、毎回墓地ミサに参加しなければ…。　（ヨハネ　小林雅人）

墓地は教会の顔、信仰の賜物、やすらぎ

墓地管理部・会計　洗者ヨハネ **柴田博**

◎はじめに

皆さん、教会の墓地に行ったことがありますか？今年5月29日に予定していた墓地ミサ（掃除共）が雨のため中止になりましたが、7月31日に2回目のミサを行いました。「昨年まで1回だったのが」と疑問の方もおられるのではないでしょうか。理由は後に述べたいと思います。

墓地は、大正・第一次世界大戦後、戦争相手国だったドイツ出身の神父様を中心に、先輩信者さんたちが幾多の困難を乗り越え、御努力されたことにより大正10年に購入されました。その後、多くの信者さんにより、定期的な清掃・草取りなど、管理・改修が引き継がれ、常に自分たちの墓地として愛されてきました。いわば山形教会発足以来の信者さん全員の“信仰の賜物”そして“ふるさと的やすらぎ”と感じるのは私だけでしょうか。

◎親近感のある、いつも楽しく行ける、誇りある墓地にする。

墓地会計担当の私ですが、墓地について色々な質問を受けます。また会計についての疑問などもあり、早い時期にそれらを解決したいとの気持ちから神父さまに話したところ、反対に「今の墓地は、みんなの墓地になっていますか？墓地を持っている人だけのものになっていませんか？」と言われました。

年に2、3回の墓地掃除、そして1回のミサ。何気なくこれまで通りにやってきて、その都度10人前後の増減は気にかかりましたが、通常ミサに来られる信者さんから見て、墓地ミサでは何人位か？は気になりませんでした。

以上のことから墓地管理部、沼沢忠一部長と相談。部長も墓地についての諸問題を考えておられ、今後について総合的に考えようとのことから、神父さまの承認をいただき、新メンバー8人（管理責任者含む）により、4月2日、第1回墓地管理部会を開催、以後2回の部会、資料による意見交換2回を実施しました。総合計画を9月の代表者委員会への提出、そして皆様からの御判断をいただくことを目指し、準備しているところです。その概要について若干紹介させていただきます。

◎今、検討している内容（案・概要）

1. 年間行事にあわせてミサと清掃

墓地は世間に向いた教会の顔です。前述したように教会発足以来、年代を超えて全信者さんが守ってきた大事な場所です。そして多くの先輩信者さんが眠られているところです。大先輩であると共にキリストを通しては兄弟姉妹？親しく言えば“じいちゃん、ばあちゃん”、“ひいばあちゃん、ひいじいちゃん”？かな。祖父母、祖祖父母を大事に、またその意向を守り、いつも明るい、きれいな墓地にしておきたいと思います。

また、教会の典礼そして一般の行事にあわせた年3回の墓地ミサは、ここに眠られている方全員のためのミサであると共に、亡くなられた先輩信者さんと一緒にミサができる数少ないチャンスではないでしょうか？言わば合同ミサとも言えましょう。皆でミサに参加しましょう。

以上の様な考えから、下記のように計画しました。その他、花壇の整備も検討しています。

4月　墓地ミサ　雪解け後の掃除、掃除後にみんなで会食（花見）
7月　墓地ミサ　軽い掃除（8月お盆、風習に合わせ埋葬者のミサ・祝別）
10月　墓地ミサ　冬前の掃除（11月死者の月のミサ・祝別、いも煮会）

2. 上記行事にあわせて、体の不自由な方や、交通手段のない方、そして全ての人のため、出来るだけ皆さんが行けるように、そして路上駐車等により近所の方、通行車両、通行人に迷惑がかからないように、その都度マイクロバスを往復運行します。（実施開始）

3. 墓地管理費等の検討

納入方法、その他について議論しています。

4. 墓地使用についての検討…次世代の人に、どのように墓地利用・使用を託していくか。

（現在墓地を使用している方、まだ使用していないが使用を希望の方、共に心配されているのが、次の世代が墓地使用を継続してくれるか？出来ない場合どうすればよいか？です。現在の規則には残念ながら該当するものがありません。今回、最難題の検討事項かもしれません。時間をかけて考えていきます。）

5. 墓地設備の改修・修繕について

上記各項目がソフト面での対策とすれば、本項はハード面での対策です。現在下記項目について、中期的総合計画を立て、順次施行していくことで考えています。

- 出入り口（門）拡幅　- 花壇の設置　- 共同納骨墓地（骨室）の拡張　- マリア像の改修　- ベンチ等の新設
- 駐車場の整備　- その他

以上が現在検討している概要です。御意見などがありましたら、是非お知らせ下さい。そして“教会の顔”“信仰の賜物”“先輩全信者さんが眠られているところ”である墓地を、これからも私たち全信者で守っていきたいと思います。

最後に今年度からの墓地管理部会のメンバーは下記のとおりです。よろしくお願いします。

管理責任者：本間神父　部長：沼沢忠一　会計：柴田博（規則により指定）
委員：笹田繁　石山敬二　西坂勝雄　梶西頼子　沼沢敬志（規則により指定）

楽しかったねサマースクール

7月27日（水）～29日（金）　舟形町・若あゆ温泉あゆっこ村

楽しかったバーベキューと子どもたちに一番人気のアユのつかみどり。

サマースクールに参加していただいた子供達の感想です。

●サマースクールで一番楽しかったのは、ロザリオを作るのが楽しかったよ。（小学1年　伊藤琴音）

●サマースクールで心に残ったこと、アユがつかめてうれしかったよ。（小学1年　渡辺ノア）

●会えなかった友達にサマースクールで会えてうれしかった。みんなで遊んで「お手紙書こうね～」と言ったので話し合いができる～と思ったよ。（小学2年　渋谷結仁）

●サマースクールの思いで。まず1つは丸山れいなちゃんと丹れいなちゃんともえちゃんとかりんちゃんと仲良くなったことです。2つめは、アユつかみどりです。けんおにいちゃんが、私にアユを渡してくれたけれど、にがしちゃったから残念でした。3つめはみんなと遊んだことです。遊べてうれしかったです。（小学5年　奥優麗愛）

●サマースクールの思い出で一番楽しかったのは、友達がたくさんできたことで、その友達とアユのつかみどり、バーベキューをしたことです。でも3日間すべての活動がたのしかったです。おりえんてーしょんも風呂もご飯も寝るときも工作もぜ～んぶ楽しいものでした。もう終わりだからさびしいけど、それまで仲良く過ごせたし、来年が楽しみです。（小学5年　高橋萌）

●この3日間で1番思い出に残ったのは、アユのつかみどりでした。バーベキューも楽しかったです。（中学1年　伊藤直道）

●サマースクールで楽しかったことは28日のアユつかみどりとバーベキューをみんなと一緒にしたことです。来年も行けたら、またみんなと遊びたいです。（中学3年　奥海峰）

子供にしたことは、イエスにしたこと

イグナチオ　中村遼

サマースクール最終日のお昼過ぎ、1台の大きな車に大人たちが乗り込もうとしています。横浜から来たサレジオ会の神父様と志願生、そしてシスターたちです。東京から来たカリタス修道女会のシスターと志願生も一緒です。自然と子供たちが走りより、彼らを囲みます。3日間ずっと一緒に遊んでくれたお兄さんとお姉さんたちに、思い思いの別れの挨拶を送ります。

車が動き出しました。なんと、子供たちは走って後を追いかけています。まるで映画のワンシーンを見ているようです。子供たちは懸命に手を振り、「またね」と呼びます。シスターや志願生たちも、窓を大きくあけ、身を乗り出して手を振り返します。

車の速度はどんどん上がり、子供たちを残して行ってしまいました。子供たちは車の行った先を、じっと見つめていました。

7月27日から30日にかけて、舟形町の若あゆ温泉あゆっこ村という場所で、子供たちを対象にしたサマースクールが行われました。参加したのは、下は保育園、上は中学3年生からなる総勢20名の子供たちです。子供たちとほぼ同じ数の大人がそれを出迎え、2泊3日の間、自然とふれあいながら共にイエスの声に耳をすませました。

子供たちは不思議に思っているかもしれません。だからこそ、あんなにも別れを惜しんだのでしょう。いままで、こんなに真剣になって一緒に遊んでくれたり、教えてくれたりするお兄さんとお姉さんには、学校でも出会ったことはない。一体なぜ、こんなにも全力でぼくらの相手をしてくれるのだろう、と。

子供たちが、いつか理解できますように。子供にしたことは、イエスにしたことだ、という確信が、シスターや志願生たちの中に、きっとあるのです。

別れを惜しんで手を振りながら、車を必死に追いかける子供たち。シスターや志願生たちの熱い思いは、子供たちの心の中に、確かに届いていたのです。

神様に3日間の体験と恵みを感謝

オタワ愛徳修道女会
Sr.楠瀬善子

7月27日（木）～29日（金）、舟形町のあゆっこ村で2011年サマースクール『カピット　カマイ～手をつなごう』が行われました。サレジオ修道会の三島神父、志願生。イエスのカリタス修道女会のシスターと志願者。サレジアンシスターズのシスター2名が企画、進行を担当して下さいました。参加者は山形、新庄そして京都からの20名。広い芝生の広場での鬼ごっこ、室内での集合ゲームやじゃんけんゲームなどのレクリェーションの中で皆がうちとけてきました。その中の「バナナ鬼」という鬼ごっこは、私にとって初めてでした。鬼に触られた人は手を合わせて上にあげ、バナナになり、捕まっていない人が助けてくれるのを待ちます。バナナになった人を助けるには、2人で合わせられた手を、息を合わせてはずさなけらばならないルールでした。鬼の動きを気にしつつ、誘い合い助けに来てくれた時のうれしさ、誰かと協力して助けることで続いていくこの鬼ごっこは、今回のテーマ『手をつなごう』にぴったりだと感動しました。夜は、生まれ育った町が東日本大震災の津波により大きな被害を受けたというシスターによる、被害を受けた町や人々の様子について、写真を使っての説明と志願生による寸劇を通して、困っている人同士で助け合える、手をつなげること。人は立ち上がれる力をいただいていること。でも人の助けがないと立ち上がれない人もいることを伝え、誰かのために何かをしたいという気持ちを大切に、何ができるか、どうやって手をつなげるかを子どもたちに問いかけました。

2日目の朝は雨。アユのつかみ取りはできるかなと、心配しましたが、朝食後、雨が上がり、予定通り出かけることができました。水を張った池に40匹のアユが放たれ、つかみ取りがスタートです。アユの素早い動きと表面のヌルヌルでうまく捕まえられず四苦八苦。7匹取った子も1匹も取れなかった子も、そしてシスターやリーダーも楽しく活動できました。昼食は捕まえたアユの塩焼きでした。頭から尻尾まで丸ごと食べる子もいて感心しました。午後は、ロザリオ作りと昨夜のシスターの話や志願生の寸劇で感じたことや、地震で被災された人のために何ができるかということをグループで分かち合いました。夜は新庄教会のお母さんたちを交えてのバーベキュー。差し入れしてくださった大きくて甘いスイカにも大喜びでした。おやすみの前は光の集い。このサマースクールで心に残っていることとこれから頑張っていこうと思うことを神様とお話しする気持ちで考え書きました。そしてグループの代表者が、午後の分かち合いで考えた被災された人のためにできることを発表し、それぞれがロウソクを捧げました。大きなロウソクの光のもとに集められたそれぞれの小さな光…。イエス様が皆を結んでくださっている、手をつないでくださっている。サマースクールで出会った仲間たちと過ごしたこの日々が、また始まる日常の中で力強い支えとなりますようにとの祈りが湧いてきました。

最終日は朝の祈りで3日間の体験を思い出し、神様にその恵みを感謝しました。そして新庄教会でミサ。タガログ語の主の祈りを、手をつないで捧げました。ミサ後は、2人の女の子がバンブーダンスを披露してくださいました。他の子どもたちやリーダー、シスターたちも次々挑戦し、楽しい時を過ごしました。そして、新庄教会のお母さんたちが心をこめて準備してくださったカレーライスをいただいて解散となりました。このサマースクールのために祈り、協力してくださったすべての人に心より感謝いたします。

感じたことを祈りにこめて

イエスのカリタス修道院
ポストラント　眞倉結花

今回山形でのサマースクールに参加させて頂き、貴重な体験をさせて頂きました。信者でない子どもたちも多く参加していて、楽しいサマースクールを通して、神様の存在に気づく良い宣教の機会にもなったと思います。

私が今回のサマースクールで一番心に残ったことは、グループ活動で小学5年生から中学3年生の女の子たちと3月に起きた震災について分かち合いをしたことです。前の日のSr.宮澤による話やサレジオの志願者がしてくださった劇を見て、自分たちに何ができるのか、どんな祈りができるのか、また自分たちも大きな地震を体験してどう感じたか分かち合いました。それぞれ、自分たちの思っていること、感じてること、決心したことを素直に口にしてくれました。小学生･中学生も自分たちなりにいろんなことを考えているのだなと感じ、私にとってもとても刺激になり、よき分かち合いができました。リーダーとして、それを、祈りという形でまとめるのがとても難しく感じましたが、皆で話し合ってひとつの祈りを作ることができました。必ず神様は皆の祈りを聞き入れてくださると信じ、皆でこの祈りを唱えました。私自身も何か参加者の心に残るように、決心したことを前向きに行うこと、そして神様の力を願うように話しました。子どもたちがどう感じたかわかりませんが、神様のことを言葉にして伝えていくことは必要なことだと思いました。

その他の活動でも、川遊びや外遊びの時には天候に恵まれ、ミサや光の集いでの祈りを通して神様の恵みを感じることができました。

今回のサマースクールを通して参加してくれた子どもたちが一人でも多く神様･イエス様の恵みに気付くことができますように。またサマースクールという形で子ども達に対しての宣教司牧の場が与えられたことに感謝し、このような活動がいろんな場で行われることを祈りながら生活していきたいと思います。なにより大きなけがや事故もなく、参加者にとっても、私たちスタッフにとっても、楽しく充実したサマースクールになったこと、神に感謝。

楽しかった! 素晴らしかった! チャリティ・コンサート

皆さんこんにちは。大切なお休みの日に、私たちのコンサートにおいでくださいまして、本当にありがとうございました。私の名前は、横山ベルフィニア・ジジと呼んでください。日本に来て、もう27年になりました。フィリピン出身です。シーアさんとは、5～6年くらい前まで、よく一緒に歌の仕事をしていたのですが、お互い忙しくなって、ずっと会っていませんでした。

それが、今年の4月、枝の主日の時に、教会の前の庭でばったり会ったんです。とても嬉しかった…。再会した嬉しさに、二人とも、いろいろお喋りしているうちに二人で大震災で苦しんでいる人たちのために、何かしたいねー、何がいい?私たちはやっぱり歌しかないねー。ということになりました。

教会でのコンサートは、本当に久しぶりです。ここでは、もちろん初めてで、何だか、ドキドキ・ワクワクしています。私たちの力は、ほんのちょっぴりしかありません。でも、弱っている人、疲れはてている人に、元気を届けたいのです。歌に、私たちの祈りと希望を込めて、津波で苦しんでいる人や聞いてくださるすべての人に届けたい、と思って、ずっと準備してきました。1回だけでは、私たちの思いが充分に伝えられないかも知れません。

そこで、今回の夏、秋、そしてクリスマス近くの冬の3回、コンサートを開いてみようと思っています。教会の人たち、初めていらっしゃった方、そして、この企画にご賛同下さる方々すべてに、こころをこめて、私たちの熱い思いを歌声にのせてお届けいたします。　（横山ベルフィニア）

7月17日、聖堂でミサ後、震災チャリティ・コンサートが行われた。横山ジジさん（フィリピン人）と斉藤アロイシアさん（サモア人）が被災者支援のために企画し、教会の皆が協力して実現した。聖堂は人でいっぱい、初めて教会に来られたという方も多かった。ジジさんとシーアさんの息はピッタリ合っていて、英語は分からなくても表情や声の感じで雰囲気が伝わり、感動的だった。お二人が心をこめて歌うのを聴き、いつか彼女たちが「神様が皆のために歌うようにと、私にこの声を下さったから、歌うのがとても嬉しいです。」と話していたのを思い出し、感謝でいっぱいだった。フラ・ダンスの先生も友情出演し、美しい笑顔でゆったりとフラを踊って下さった。神様がこうして私たちを一つに結んで下さっていると実感した。教会は、これからも今まで以上に、苦しんでいる人がいたら、知恵も力も出し合って、助け合っていきます。　（Sr.築沢由美栄）

東日本大震災と原発事故から

マリアコルベ
西坂陽子

東日本大震災から4ヶ月が過ぎて、被災地にも心に深い悲しみを負った方々が、一生懸命に復興へと前に向かって立ち上がる姿に希望の光が見え、励まされる思いがいたします。

私の住む福島は大震災の後、原発事故による甚大な被害に苦しんでいます。放射能汚染による野菜、くだもの、肉類、魚などの実害、それと風評被害のWパンチ。子どもたちは今もまだ不安な学校生活を余儀なくされています。

本格的な放射能除染作業はこれから、まだまだ解決すべき課題は山積しています。事故発生当時は放射線量が日を追う毎に上昇し続け、家の窓は閉めきったままで、部屋にこもったままになってしまい、放射線量の高い数値に怯え、年老いた義母の事、愛犬の事、仕事の事など「このままどうなってしまうのだろう」と、避難すべきかどうか真剣に悩む日々がありました。

そんな時、本間神父さまから「すぐに避難して来て下さい、用意してありますから。」と言葉をいただき、それまでの緊張が解け、落ち着いて物事を考えられるようになりました。不安でいる時、周りの人の励ましと、心に寄り添って下さった事にとても感謝しています。

自然と共に当たり前に過ごしていた普通の暮らしが、恐ろしい事故によって壊され、失ったものの大きさ、大切さ、元には戻らない事の無念さと向かい合って、長い年月がかかる事でしょう、少しずつ以前の生活が送れたらと思います。

住み慣れた地を離れたり、家族と離れたり、辛く苦しい思いで避難の日々を過ごしておられる方々に、神様の祝福があります様に、お祈りいたします。

マリ･レテチェ　阿部康子
元アナウンサー
現在　東北文教大学教授
マリアこまくさ保育園園長
山形女性団体協議会顧問

写真左／受賞後の記念写真。中央の与謝野国務大臣の右隣に座っておられるのが阿部康子さん。

内閣総理大臣表彰受賞

― 阿部康子さんにお聞きしました。―

―― この度、男女共同参画功労者として総理大臣表彰を受賞されておめでとうございます。受賞されたのは全国で9人とのことですが、「男女共同参画社会つくり」とはこの冠の組織があるのかとおもっていましたが、そうではないのですね。

阿部　そうです。1999年に制定された基本法があって、男性だから女性だからということで活動の領域とか行動の制限のない社会をつくろうという考えに基づいて各地方で色々な分野で活動がなされていることを一括してそのようにいいます。山形市も平成10年に男女共同参画都市宣言をしています。

―― 阿部さんは宣言文作成部会長を務められたのと、また山形市女性団体連絡協議会の副会長･会長を10年の長きに亘ってお努めになった功績に対して表彰されたわけですね。今も顧問として関わっていらしてこの間、何かとご苦労もおありだったのでは?

阿部　今ほど女性が認められていなかったし、また1999年の山形市の宣言文作成時には何度も文案の練り直しをしなければならなかったりとか、女性団体の会長になった時には一番若かったので、意見をまとめるにしても皆さんの協力がなければ出来なかったですね。でもその当時、役員の中に教会の方がいらして本当に支えていただいたと思います。

―― 阿部さんはこれまでずっと大学の教授ですし、今はマリアこまくさ保育園の園長もされていて、長い間に三筋、四筋の道をこなしながら歩んで来られたのは大変でしたでしょうね。

阿部　そうですね。振り返ってみますと、それぞれが違う場面だったように見えるのですが、結果としては神さまが用意して下さった一本の流れのように歩いてきたのだなぁ…と。最初は表現するというアナウンサーという立場で社会に出たのですが、そこでいろんなことに気付かされて、そしてこの女性団体活動で社会の問題に取り組み、大学では学生という若い世代に自分が語りかけたいのは何だろうかと考えて、今度は最終的に0歳からの子どもたちの生活する場に置いて下さったんだなぁ。ということを感じております。

―― でも、大変なご苦労があっても前を向いて良い方向へと努力なさったことが神さまと共に歩んでこられたのではないでしょうか?

阿部　そうですね。私は自分の霊名が「よろこび」という言葉からなっています。いつも喜んでいなさい。いつも感謝しなさい。祈りなさい。これは、もう一生変わることのない自分の中心にある「みことば」だと思っていますので…。

―― 公務でお忙しいでしょうが、教会でも阿部さんがいなきゃというお仕事もありますので、これからもご活躍くださいますように。今日は普段伺えないお話をありがとうございました。　（聞き手／マリー･ベルナデッタ　工藤和子）